

筑紫野のクニグニ——弥生時代の遺跡群



隈・西小田地区遺跡第3地点の109号カメ
棺出土状況

古代中国の歴史書によると、紀元前1世紀（弥生時代中期）ごろには北部九州に「国」が成立していて王が君臨していたことが知られる。そのうち対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国の5国については、すでに所在地が明らかにされている。すなわち、末盧国は唐津平野の宇木汲田遺跡・桜馬場遺跡（唐津市）に、伊都国は糸島平野の三雲遺跡（前原町）に、奴国は福岡平野の須玖岡本遺跡（春日市）にそれぞれ中心地が比定されている。そのなかで王墓とみられるカメ棺には、多数の前漢鏡や青銅武器、玉類などが副葬されており、中国と交渉力をもった強大な王がいたことがうかがえる。

ところで、当時の北部九州には代表的な5国のほか、記録にその名が見えない中小規模のクニも数多く存在していた。『魏志倭人伝』にいう「旧百余国」がそれである。筑紫野域に限ってみれば、これまでに二日市峰畑遺跡、道場山遺跡、隈・西小田地区遺跡（筑紫野市）、峯遺跡、吹田遺跡（夜須町）など首長クラスの墓地が発見されており、これらがかつて「百余国」を構成していたクニの一部であると思われる。

さて、福岡平野にあって30面前後の前漢鏡を持った強大な奴国王、その奴国に隣接する

筑紫野域のクニグニ——。それは奴国を構成するクニグニのひとつなのか、あるいは奴国外にあって、一定の独立性を保っていたクニなのかまだ明確ではないが、それぞれ首長を擁した、まとまりのある地域であったことは明らかである。

ここでは、市内の首長墓について紹介する。

■隈・西小田地区遺跡（光ヶ丘）

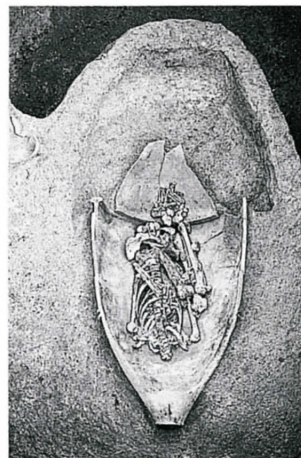
弥生～古墳時代を中心とした遺跡群で、第3地点では弥生中期のカメ棺約130基が発見された。そのなかで中期前半（約2100年前）のカメ棺から、細形銅剣と右腕にゴホウラ貝製の腕輪8個を装着した40才代と推定される男性の人骨が検出された（写真）。この人物は、カメ棺群に葬られた集団を率いる首長と思われるが、さらに注目すべきことは、他のカメ棺群から被葬者の体内に打ち込まれたと思われるおびただしい数の鍔や折れた石剣、首を切断された人骨などが検出されたことである。これは、ムラからクニへの統合が激しい戦闘によって実現されたことを物語る重要な発見である。なお、同遺跡13地点では中期前半の首長墓につぐ中期後半の首長墓も発見されている。

ふつ かいちろねはたいせき
■二日市峰畑遺跡

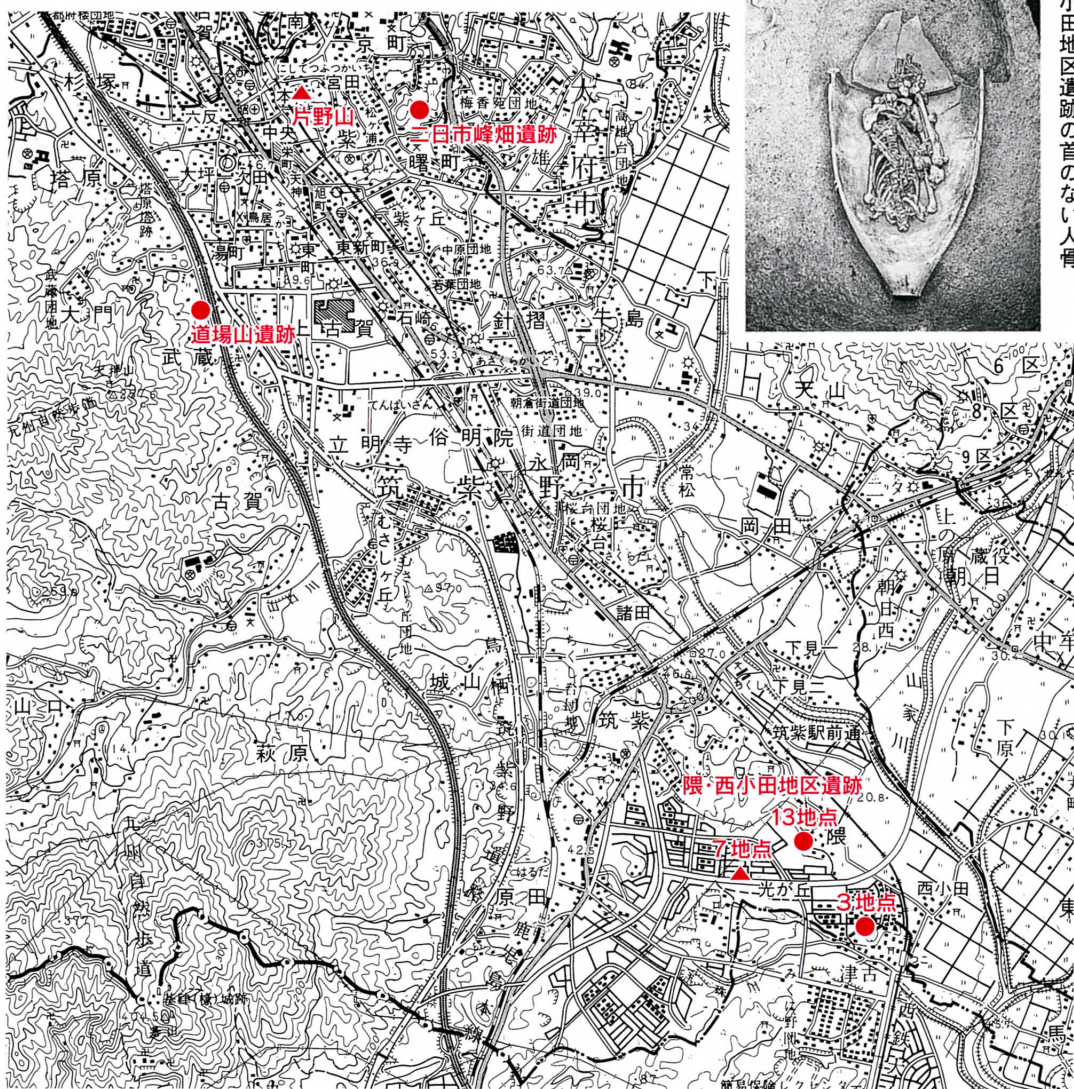
安政4年(1857)10月、二日市村字峯で檀苗を植えるときに偶然にカメ棺が発見された。当時、二日市村の庄屋であった鹿島九平次は、そのときの模様を図面を付けて詳しく記している(『銚之記』)。それによると、棺内には前漢鏡1面、中細形銅剣1本が副葬されており、棺内面には朱が塗られていた。副葬品から弥生時代中期後半の首長墓と思われる、この一帯にクニの存在が想定できる。

どじょうやま
■道場山遺跡

市内大字武蔵にあった弥生時代の墓地群。九州縦貫自動車道の建設に伴う発掘調査で中期後半～後期初頭のカメ棺112基が発見され、そのうちの1基には鉄戈が副葬されていた。この集団を率いる首長の墓であり、この一帯にもクニがあったと思われる。



隈・西小田地区遺跡の首のない人骨



※この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「甘木」を使用したものである。

※●=鉄戈・鉄剣を副葬したカメ棺遺跡 ▲=銅戈の一括埋納遺跡